

見られる如く、今世紀末まで展望した

としても、政策に大きな変化は期待できず、見通しは決してバラ色ではない。

●サミットは、このように次第に長期的な問題を討議するようになったが、一方では緊急もしくは具体的問題に対しても態度を明らかにしてきた。各国首脳はこのような大会議の結果何らかの具体的成果を示す必要を明確に認識していたからであろう。サミットに対する人々の関心は年々高まっており（オタワ・サミットに集まる報道陣は千五百人―二千人と見られている）、高まった期待を満足させるのはますます困難になっている。

●単に集まるだけで各国および世界の問題が解決されるわけでもないのに――事実第一回会議から七年の間われわれは同じ問題を抱えている――、首脳会議はいぜんとして続いている。各国首脳はサミットを彼らの行事予定の中で必要かつ中心的な要素と考えるようになった。サミットはまた、国際経済全体の年間計画表においてもますます重要な役割を果たしている。

●宣言文には、参加国の一部にとって国内的に物議をかもし恐れのある表現が全員一致で採用されることが少なくない。しかし各国首脳はそれらの字句に必ずしも不満ではなかった。各国首脳はむしろ、保護貿易主義などを求める国内圧力に抵抗する上で、あるいは米国におけるエネルギー価格決定問題で望ましい方向を打ち出す上で、互いに

補強し合う必要があるからだ。

●サミットの活動領域は、ランブイエで討議された基本的な経済問題を超えて次第に拡大されてきている。たとえばベネチアでは、まぎれもない政治問題が討議され、宣言文にも盛り込まれた。アフガニスタン問題がその好例である。テロリズムとハイジャック問題も然り。ベネチアでは難民問題が討議された。

●サミットには常設の事務局はまだない。ただ、各国に新しく首脳個人代表がおかれるようになった。首脳個人代表は、ひとつのサミットが終了したのち、そのフォローアップを行うと同時に、次の会議の開催準備を委任される。その準備は、次期主催国の首脳個人代表が全体を主導する。エネルギーに関しては、ベネチアの公約実現を監視する具体措置がとられた。最近、民間の四つの政策研究機関が自由主義諸国の協議体制について共同で行った研究報告が出されたが、その報告はサミット準備の組織化の必要性を指摘し、小規模の常設事務局設置の検討を提言している。だが私はこの考え方に疑問である。常設事務局はサミットの「官僚化」につながる危険があるからだ。各国首脳自身も当然、サミットの準備と事後措置を自ら指揮し、常に直接関与を望んでいると思われる。

政治問題への取組み

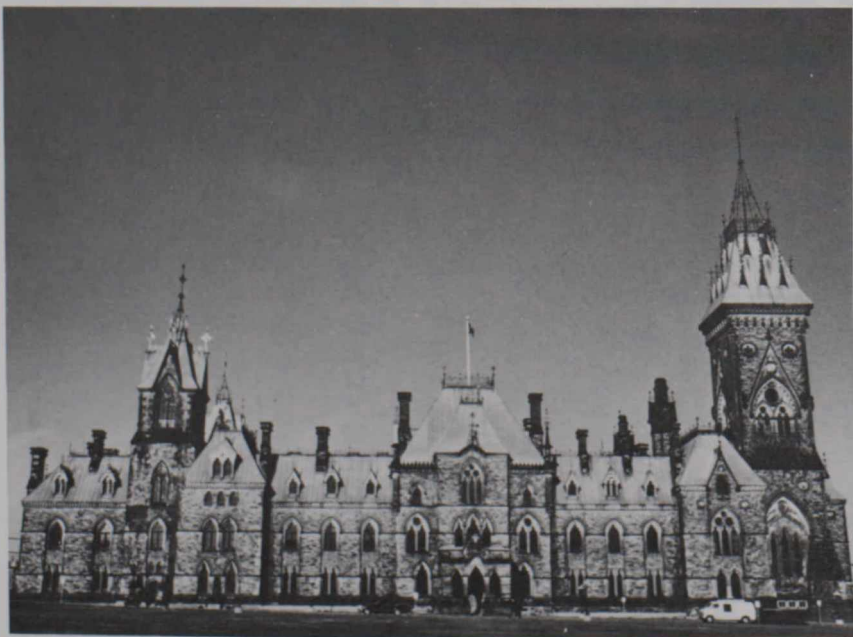
過去六年間のサミット宣言を諸先進国

サミット会場(二)

議事堂 イースト・ブロック

カナダ連邦議事堂は、センター・ブロック（中央棟）、イースト・ブロック（東棟）、ウェスト・ブロック（西棟）からなる。センター・ブロックは上院本会議場、下院本会議場、議会議事館などのあるところで、真正面に平和の塔が高くそびえている。ウェスト・ブロックには議会議員の事務所および下院の委員会室となっている。イースト・ブロックはピクトリアン・ゴシック様式の、いくつもの高い尖塔、彫金をほどこした窓枠、奇抜なガーゴイル（楯嘴）などが奇妙に同居している建物で、二階には首相執務室および閣議室などがおかれている。オタワ・サミットの二日目の会議は、このイースト・ブロックの一室で開かれる。

三つの建物のうち、建築当時（一八六五



正面から見たイースト・ブロック。サミット会議は首相執務室のある2階で開かれる。

年）のままだに残っているのはイースト・ブロックだけで、元のセンター・ブロックは一九一六年に焼失し、ウェスト・ブロックは一九六〇年代に内部が改造された。

イースト・ブロックは、一一年もの間、カナダ政府の中枢部を擁してき